

# 「竜王らしい、竜王ならではの」の文化とは

～ 人と道と自然が紡ぐ竜王の文化的景観 ～



令和2年5月

竜王の文化を検討する懇話会

# 目 次

はじめに	1
竜王 新古今八景	
～ 豊穰を約束する「古からの道」 ～	
① 「豊作を予感させる植付前の水田に映る夕光」	3
～ 兵どもが夢の跡。それぞれの思いが遺す栄枯盛衰の道 ～	
② 「権力を求め、心の安寧を望み、先端技術を競った証。町内の古墳や史跡」	4
～ 流行の風を読み、そして、風と遊ぶ、華やぐ未来への道 ～	
③ 「衣・食・住に、時代を映す若者たちの姿」	5
～ 四季折々に表情を変え、食卓を彩る恵みの道 ～	
④ 「道の駅アグリパーク竜王を中心に広がる畑や果樹園。そして、立ち並ぶ牛舎群」	5
～ 幾多の変遷を経て現代的工業の町へ。土に根付き、今も歩み続けるものづくりの道 ～	
⑤ 「ものづくり日本を担う企業の立地とそれを支える物流の発展」	6
～ 故郷の安寧を祈る人々 そして 心の平安へと誘う里中の道 ～	
⑥ 「ふるさと竜王を鎮守する2つの神社と町内各地に根付く氏神信仰」	7
～ 時空を超えて続く神ながらの道 ～	
⑦ 「農耕と民俗芸能にまつわる祭事」	8
～ 歴史ロマンに心が躍る 里山の道 ～	
⑧ 「古からの歴史と共に故郷を見守る2つの山なみ」	9
最終章	10
おわりに	12
用語解説	13
懇話会委員名簿	17

## はじめに

～ これまでも、そして、これからも大切にしたいもの ～  
古今竜王。その「時の経過」の座標軸と心の拠り所”

「緑と文化のまち 竜王町」。町の関係者や町民なら、おそらく一度は耳にしたことがあるフレーズではないだろうか。では、「緑や文化」とは、特に「文化」とは何なのか。この誰もが抱くであろう“古くて新しい問いかけ”に一定の整理をし「竜王らしい、竜王ならではの」の提案をめざしたのが今回の取り組みである。

文化という言葉は、広く認識されているものの、「竜王の文化」とは、一体何なのかと問われるとひとりで答えることは難しい。狭義には名勝史跡ということになるのだろうか。また、生活視点からは、食、生業、風俗・習慣などが頭に浮かぶ。

今回、私たち懇話会では、多岐にわたる分野に切り込むに当たって、漠然と整理することは抽象論の中で同じ場所をさまようだけでは、との危惧を抱いた。そこで、一般の方々にもイメージしやすい視点として、当町を代表する景観を紹介した「竜王八景」を従前とは異なる視点を用いつつ「新たな八景」として取り上げることで、「竜王の文化」を身近なものとして提案させて頂くこととした。

早いもので、今の竜王八景が提案されたのは平成13年のことであり、既に二十年近くが経つ。この間、竜王八景も、時の経過とともに、周囲の環境の変化の荒波にもまれ続けてきたといえる。

例えば、大型商業施設や新しい企業の誘致が挙げられる。竜王インターチェンジに隣接して、大手資本によるショッピングモールが開業した。若者のファッションを牽引する有名ブランドが軒を連ねて、週末には、県内はもとより、京阪神、遠くは東海、北陸ナンバーの車も列をつくる。このことと相まって、県外や町外からの交流人口の著しい増加が見られる。目を転じれば、町の中央部には、町民の積年の願いであり待望久しかった商業モールや医療機関が進出し、食料品や日常雑貨を中心に町民の暮らしを支えている。今や、町民にとって当たり前の施設として、その存在感は大きい。また、インターチェンジから車で数分の工業団地には、首都圏から技術開発部門と県内他所から製造部門を集約した形でわが国の鉄道設備分野のトップ企業が操業した。既存の自動車メーカーと併せ、町内からの雇用も見込まれ、加えて、従業員の一部には新住民として町内に住まわれる例もある。人口減少の流れを止めるには至らずとも、今後に向け、抗う一石を投げつつある。後続企業の名も挙がる中、数年後、車窓の眺めは近代的施設群が醸し出す壮観なものとなるだろう。更に、県下2位の利用を誇る竜王インターチェンジも、前述の状況の変化や新名神の開通が、その利用に変化を招き、現在では、平日での町内企業関連の原材料や製品の輸送と、週末を中心とした若者や、若い家族層の利用へとシフトしてきている。

一方、当町の基幹産業である農業では従来の有機農法を取り入れた農産物の生産を基盤としつつ、竜王産の果実や野菜の旬の風味をそのままに独自製法によるペーストやゼリー等の加工食品の開発やこれらをパッケージ商品化した「竜ノコバコ」等の道の駅および大規模商業施設での販売を始めとする付加価値を求めた取組み、いわゆる6次産業化への道を歩んでいる。また、人々の健康志向の高まりや環境保全の視点を背景に、グリーンツーリズムやエコツーリズムといった、「体験」型を合言葉とした観光面から農業を楽しむ視点が注目される中、都市圏の子育て層を主な対象とする田植えから稲刈りまでの稲作農業体験の提供による竜王の魅力発信に取り組んでいる。

これらわが町の産業を取巻く状況の変化は、社会や町民の価値観の多様化を一層促したと考えられ、「時間の経過は、時代の変容」として顕在化し、これまでのあり方ではなく、新たな対応が求められている。

大きく変容する社会と人々の価値観。この「現代の文脈」をしっかりと認識し、今回提案する『竜

『王新古今八景』は、景観をベースとしつつも、これらにまつわる「衣・食・住」にも可能な限り光を当てることとした。そして、鉄路のない当町は、古くから道（街道）が人々の生活や文化の伝播に重要な役割を担ってきたと考えられることから、この報告書での提案は「道」を切り口としている。

また、いかように時代が変わろうとも「その土地の文化（その土地らしさ）を支えるのは、そこに住む人々である」ことは不変であり、普遍である。いたずらに新しいものばかりに目を向けることなく、竜王に暮らす人々と町が、「交流」をキーワードに、竜王ならではの存在根拠を大切にしながら未来の町民に胸を張って伝えることが出来るもの、そして、観光、産業、教育等、それぞれの分野で今後のまちづくりの指標となるものとして提案したい。

令和2年5月

竜王の文化を検討する懇話会 一同

今回、提案する「竜王新古今八景」は、既存の「八景」にみられたような、景観に焦点を絞り、それに関わる伝承を紹介するものとは異なる。各事例の中で触れるように、「悠久の過去からたゆまず引き継がれてきたもの。それは、当地に根付く風習、人々の生業、また、今日に至るまで連綿と受け継がれてきた地域の価値観」を意識したものとしている。加えて、時代の経過とともに取り巻く環境も大きく変化しており、ふるさと竜王を形づくる「新しい顔」としての事実も真摯に受け止めたものでもある。

これらは、たとえ「目には観えない」ものであったとしても、伝承などと共に「町民性」を形づくる重要な柱として、無意識の内に、私たちの心の中に宿るものと言える。換言すれば、「町民それぞれの持つ新旧にわたる郷土愛が育んできた心のあり様」とでも表現できようか。具体的には、史跡・名勝等の有形無形の文化財をはじめ竜王に残る食や信仰など、併せて、竜王の将来を予感させる新しい姿も必要に応じて紹介し提案としたい。

なお、最終章では、これらの提案を基に「竜王の文化とは」を総括し定義づけを試みたところである。

## 【 竜王 新古今八景 】

～ 豊穰を約束する「古からの道」 ～

### ①「豊作を予感させる植付前の水田に映る夕光」

肥沃な大地。整然と区画された水田は、まるで、古代条里制を継承したとでも言えようか。湖国を代表する穀倉地帯の一角を担う竜王には、見渡す限り水田が広がっている。



風薫る初夏、一面の水田は鏡のようにその光を放って植付の時を待っている。そして、鏡山を背景に日没前の夕陽は、あらん限りの力を振り絞り、ひと際鮮やかなオレンジの光を照らし出す。やがて、漆黒の中に星が瞬き始める。有史以来、稲作を生業とした祖先も、この光景を目にしていたに違いない。大地そして自然への畏敬の念を抱きながら・・・。

稲作と言えば、町内田中地区の「粥占い」が思い浮かぶ。粥の出来栄えで、その年の豊作を占う神事。このように町内の旧集落には、氏神信仰と融合した農耕ちなに因む神事や祭事が今なお受け継がれている。

里山が緑に覆われたけのこ筍が顔を覗かせる頃、町内各区の五穀豊穰を祈る春祭は佳境を迎える。祭礼当日、竜王を始め東近江地域の一部の家庭では、この地ならではの郷土料理で来客をもてなす。「寒鰯のぬた」もその一つである。内陸の当地では、冬から春にかけての貴重なタンパク源として古くから食されてきた。また、左党には酒の肴としても欠かせないが、今日、町民でも知る人は少なくなり、食したことのある人はさらに限られている。さらに、湖北の郷土料理といわれる「鯖そうめん」も、戦後しばらくまで当地でも家々で調理に工夫を加え、祭事等にその家ならではの手作り料理として振る舞われたようで、当時を知る町民は記憶に残る御馳走としてその味覚を懐かしむ。



ふるさと竜王に伝わる郷土料理の数々

時代の潮流もあり、大きく変貌をし続ける農村の原風景や暮らしに根付く氏神信仰。味覚が覚える当地ならではの食。私たちの五感に訴える文化的景観である。

～ 兵どもが夢の跡。それぞれの思いが遺す栄枯盛衰の道 ～

## ②「権力を求め、心の安寧を望み、先端技術を競った証。町内の古墳や史跡」



往時の為政者が葬られた古墳（老々塚古墳）

4～7世紀。当時の竜王は大和政権が依拠した畿内に隣接し、当時の幹線道路が通るなど、交通の要衝として、この周辺の覇権を求め豪族たちが群雄割拠した。そして、覇者は、軍事上の拠点、また、権力の象徴として居館を築き、亡くなると配下の者が、死後も魂を崇拝すべく遺体を厚く葬った。つまり古墳である。町内各地には、往時を今に伝える古墳が数多く点在している。

また、鏡山の麓の丘陵地には県下最大級の規模で須恵器の古窯址群がある。このことは日本書紀垂仁天皇三年の条で、天日槍の伝承として触れられている。このことを物語るように鏡地区に鎮座する鏡神社は天日槍が祭神である。

その外、町内には朝鮮半島からの先進技術集団がこの地に至り、定住したといわれており、多岐にわたる分野で活躍したと伝えられ、「弓削、綾戸、鏡、須恵、薬師」の地名に、その名残が窺える。さながら、今でいう、日本のテクノポリスだったのではないだろうか。夢は膨らむ。



須恵器生産の拠点。鏡山古窯址群の調査の様子



木造薬師如来坐像（田中地区 淨満寺 蔵）

有史以来、いつの世も、人々は心の拠り所を求めてきた。狩猟や農耕に生存の端を発する祖先にとって、それは、自然崇拝の形をとりながら、本能として種の保存に繋がる祈りであった。しかし、6世紀の仏教伝来を契機に7世紀も中葉に至ると、畿内から地方へとさざ波の如く、寺院・仏像への崇拝に変容していく。当時のこの地も、例外ではなく、渡来人のもたらす大陸文化と相まって、以降、町内には多くの寺院が建立された痕跡が残る。古くは白鳳時代の創建とされる雪野山麓にある雪野寺跡、続く鏡山中腹にある雲冠寺跡そして山麓の西光寺跡と連綿と3つの文化は継承されてきた。そして、悠久の時間を経て、町内各地の寺院に安置される多くの仏像群として今に伝えられ、他にない優れた文化となっている。

古代から今に至る竜王の様々な姿。それは、無意識の内に、私たちに地域遺伝子のようにして刻み込まれている。



木造阿彌陀如来像  
（薬師地区 薬師堂 蔵）



八角形石灯笼（西光寺跡）

～ 流行の風を読み、そして、風と遊ぶ、華やぐ未来への道 ～

### ③「衣・食・住に、時代を映す若者たちの姿」

開通から約40年。週末や休日の朝8時を回ると、老若男女を問わないグループ、そして、家族連れを乗せた車が列をなし、出口から目と鼻の先にある大型商業施設をめざす。現在の竜王インターチェンジの光景である。施設のオープンから9年。この間、増床もあって、西日本最大級のショッピングモールとなった。足を踏み入ると、多くの若者や家族連れで賑う三井アウトレットパーク滋賀竜王(MOP)。耳をそばだてれば、関西弁に混じって、時折、東海地方や北陸地方のお国訛りが聞こえてくる。最近では、カタコトの日本語や横文字言葉も飛び交うことが珍しくなくなってきた。中国や韓国を始めとした東アジアさらに東南アジアなど、海外からの来訪客が増えていて、場内アナウンスも日本語に続いて中国語でなされるほど。さながら、「人が行き交う国際インターチェンジ」のごとく、遠近に関係なく、様々な地方そして海外からの来客が絶えない国際色豊かな買い物名所となっている。年間入込者数は、約600万人以上といわれ、竜王町の人口の500倍を超える。



若者でにぎわうMOP

施設内では、流行に敏感な若者をターゲットに、衣料や装飾品を中心としたヨーロッパやアメリカ発祥の人気ブランド店が軒を連ねる。マスコミに紹介される飲食店は行列をなし、今や対外的には現代文化を象徴するかのよう「当町の新しい顔」としての存在感を示している。

私たちの町「滋賀・竜王」。時代の変化に敏感な若者文化の発信拠点の顔も併せ持っている。

古来、当町を行き交う街道がもたらしてきた人と物との交流、そこから派生してきた様々な文化。換言すれば「交流の文化」が連綿と引き継がれているからこそ、時代の寵児ともいえるアウトレットモールがこの地を選んだのも歴史の必然と言えまいか。竜王がこれまで培ってきた「交流の文化」の延長に今の姿があるのではないだろうか。

～ 四季折々に表情を変え、食卓を彩る恵みの道 ～

### ④「道の駅アグリパーク竜王を中心に広がる畑や果樹園。そして、立ち並ぶ牛舎群」

遠くに琵琶湖を望む丘陵地の中ほどに、ひと際目を惹くオレンジ色の屋根。スペインの田舎町をモチーフにして造られた「アグリパーク竜王」は、国道477号沿いの「道の駅」だ。辺りに遮るもののない広大な湖東平野の一角に位置し、一年を通して季節の移ろいに彩られる。果樹園では、1月の苺に始まり、桜桃、桃、葡萄、梨や柿など。行楽シーズンには旬の味覚狩りを楽しもうと多くの家族連れで賑わう。そして、果樹園に続く畑地では、四季折々の野菜が収穫される。健康志向もあって新鮮な野菜を求めて、町内外から多くの買い物客が集まる。



丘陵地に建つ「道の駅 アグリパーク竜王」また春には、菜の花やチューリップが来訪者の目を楽しませる。遠くに目をやれば、穏やかな稜線の向こうに牛舎が群を成すようにして、この野の風景を彩っている。

ここ竜王は、今や、国内はもとより海外にまで世界規模でその名を馳せる日本三大和牛の一つ「近江牛」の発祥の地でもある。地元産の食材を用いた「すき焼き」は、数ある和食鍋料理の中でも、当地が全国に誇る秀逸の一品といえる。

このように、近年注目を浴びる「竜王の農の恵み」は人々の新たな交流を産み出し、このことが未来を創造する原動力に繋がっていく。「農と食」を通して、訪れる、そして迎える人々に自然の魅力を届け続ける丘陵地は、私たちの日々の生活に潤いを与えてくれる「恵みの道」といえそうだ。

～ 幾多の変遷を経て現代的工業の町へ。土に根付き、今も歩み続けるものづくりの道 ～

## ⑤「ものづくり日本を担う企業の立地とそれを支える物流の発展」



竜王インターチェンジ全景

町土を東西に貫く名神高速道路が全て開通したのは昭和 40 年(1965)。これが今の町の姿への伏線となる。高度成長期が終焉を迎えた昭和 49 年(1974)に、大手自動車メーカーの主力工場が立地し、昭和 56 年(1981)には、名神高速道路竜王インターチェンジが開設された。いずれも当町にとって時代を象徴する出来事として振り返ることが出来る。

現在、当町の工業生産額は県内 19 市町中 2 位で、これは、大津市や草津市等の都市部を凌いでおり製造業を中心に「ものづくりの町」とも言える。しかも、一定規模以上の事業所数は県内 18 位と 2 番目に少なく、如何に、大手自動車メーカーの影響が大きいかがわかる。また、インターチェンジの開設は当町の物流の利便性を飛躍的に向上させ、物流拠点として確固たる地位を得るに至った。県内 2 位の通行量はその証左であり、周辺には、全国にネットワークを持つ運送会社が数多く立地している。さらに、滋賀竜王工業団地では、既に大手や気鋭の企業を中心に約 8 割を超える誘致が内定しており、今後、全ての区画が埋まるだろう。これらの工場が本格稼働すれば、工業生産額で県内 1 位の座も現実味を帯びたものとなる。



滋賀竜王工業団地 全景

太古、当時の先端技術を駆使した須恵器の生産に源を辿る「ものづくりの種」は、大規模工場の進出や工業団地の開発とその姿を変えて脈々と引き継がれ、令和の今、まさに咲き誇ろうとしている。



工業団地の一角にある工場全景

町内中央部に広がるのどかな田園風景からは想像もつかない「もう一つの姿。ものづくりのまち竜王町」それを支える、高速道路を中心とした幹線道路の連絡網の充実。光明の下、過去から未来へと向かう、ものづくりの道に邁進する竜王町の姿がそこにある。

～ 故郷の安寧を祈る人々 そして 心の平安へと誘う里中の道 ～

## ⑥ 「ふるさと竜王を鎮守する2つの神社と町内各地に根付く氏神信仰」

町域を東西から包み込むように位置する雪野山と鏡山は、何れも別名竜王山とも呼ばれ、農耕を生業とする当地で、天候に頼るしかない稲作は架空の龍を水神と崇め雨乞いをする竜神信仰と結びつき、その名に名残を留め、さらに町名ともなった。そして、この竜王の地域を鎮守する神社が「苗村神社と鏡神社」の2社であることは、町民誰もが認めるところだろう。



雪野山（東の竜王山）

鏡山（西の竜王山）

苗村神社は「なむらさん」と親しみを込めて呼ばれる。古くは延喜式神名帳に名を連ねる「式内社」であり、近郷三十三カ村（郷）を鎮守すると言われ、春大祭や節句祭には多くの参拝者で賑わう。



苗村神社の楼門

また、中世に建てられたとされる東西本殿や楼門等は歴史的価値も高く国宝や重要文化財に指定されていることから、近年は、観光スポットとして注目を浴び、来訪者も多い。尚、33年に一度の式年大祭は、町の行政区を越え隣接市の一部も関わるもので、湖東地域屈指の規模で行われる。

鏡神社は、国道8号沿いにあり、朝鮮半島からの渡来文化を鏡の地に伝えたといわれる天日槍を祭神としていて、本殿は重要文化財である。また、地元の鏡地区は平安時代末期から鎌倉時代に東山道（江戸時代以降は中山道）の鏡の宿として賑わっており、平治物語には、奥州に向かう義経がこの地で元服し、その際、源氏の再興と武運長久を祈願したとの伝承もある。後に悲運の死を遂げた彼を慕い、訪れる歴史愛好者は後を絶たない。



鏡神社本殿

なお、国道を隔てた道の駅竜王かがみの里では義経伝説にちなみ、鏡神社の協力を得て毎年3月に「鏡の里元服式」を催している。全国からの参加者を、鎌倉時代の武士の祝膳を参考にした「義経元服料理」で饗するなど、観光を糸口に地域活性化の一翼を担っている。



岡屋地区 勝手神社

竜王町内には旧来より二十数か所の集落が点在し、そのほとんどに神社があり、氏神信仰が今に伝えられている。農耕を主産業としてきた当町では、村の氏神は五穀豊穰を約束し、それぞれの地域やそこに住む人々を守る神として、集落の住民（氏子）から崇敬されている。

現在、町内を縦横に走り多くの車が行き交う大通りはもとより、地元の人だけが知る脇道まで、その多くが、この地域や集落の平穏無事を祈願するため、人々が崇敬する社へと辿った「祈りの道」だったのかも知れない。

～ 時空を超えて続く神ながらの道 ～

## ⑦「農耕と民俗芸能にまつわる祭事」

古来、農耕を中心とした生業の町ゆえ、稲作と氏神信仰が融合した神事が多い土地柄であることは前述した通りであるが、ここでは、「農耕神事」と「民俗芸能神事」の視点から例示してみたい。

### 「虫送り」

御壺<sup>ごりょうしんこう</sup>信仰にも関係するといわれる「虫送り」は、中世に始まったとされる農耕神事である。毎年、7月16日に行われる「虫送り」は、祖父川沿いの岡屋・小口・薬師・七里の4地区が1つの「虫送り」の単位となっている。害虫を追い払うため、岡屋地区から順に七里地区まで、田んぼの中の「虫送り道」といわれる野道を、松明の炎の後に鉦<sup>かね</sup>や太鼓を叩きながら行列をなして、川上から川下へと地域が連携しバトンを繋ぐがごとくその火が引き継がれる。松明の火で生育途上の稲に害虫がつくのを追い払い、その年の豊作を祈るものである。農家にとって大切な行事とされ、戦時中も絶えることなく今に続いている。



鉦、太鼓、松明。昔ながらの虫送り風景

また、集落ごとに終始しがちな神事が多い中で、複数の集落が「虫送ろう道」でつながり今も継承されているのも珍しい。

この「虫送り」。今は、害虫駆除技術の進歩や松明に使う菜種も殆ど栽培しなくなったこともあって、廃れてきている。当町では、他に、町内東側の日野川沿いと中央の惣四郎川沿いの各集落をそれぞれに繋ぐ2つの「虫送ろう道」があり、そこで行われていたものの昭和47年には途絶えてしまった。しかし、現在、一部で復活している。他の地域では見られない豊作を祈る行事の復活は、竜王の地が稲作を基盤として連綿と続いていることを物語る。

### 「山之上のケンケト祭」

ケンケト祭は、鉦<sup>かね</sup>や太鼓、そして歌舞によって賑やかに斎行される盛大な祭である。その由来については諸説があるものの、一説には、戦国時代に織田信長軍に従って戦った山之上の人々の姿を再現したものとされる。この祭りは、地元山之上の杉之木神社と東近江市宮川の八坂神社の合同で行われる。この両社に残る言い伝えによると、中世、この辺りの農地への灌漑<sup>かんがいようすい</sup>用水の円滑な利用のためには二つの地区の共同と連帯感を強くすることが求められ、その願いを背景に行われてきたともいわれる。京都の祇園祭のお囃子とも相通じる賑やかなケンケト祭であるが、前者が山鉦巡行をはじめ時代の変遷とともに、華やかに変容してきたのに対し、ケンケト祭は中世の原型を留めて現在も行われており、その芸術的価値は非常に高く評価されている。



山之上ケンケト祭

このため、令和二年三月に「近江のケンケト祭り長刀振り」として国の重要無形民俗文化財に指定されると共に、わが国の貴重な文化遺産である「風流踊<sup>ふうりゅうおどり</sup>」としてユネスコの無形文化遺産に申請することになった。(令和二年三月現在) 今後、しっかりと継承していきたい竜王の誇りである。

～ 歴史ロマンに心が躍る 里山の道 ～

## ⑧「古からの歴史と共に故郷を見守る2つの山なみ」

町民憲章冒頭では「わたくしたちのまち竜王町は二つの山なみを背景とした沃野に生まれ」と、豊かな自然環境を謳っている。竜王町の文化を語る時、太古の昔から私たちの「ふるさと竜王」をその山懐深く抱くように見守る、そして、日々の生活で町民が必ず目にするこの「二つの山なみ」を外すことはできない。

東の雪野山と西の鏡山。共に、農耕に欠かすことのできない水を求め、雨乞いの竜神が祀られていたことから「竜王山」とも呼ばれ、町名の由来にもなっており、広大な沃野を挟んで互いを確かめ合うように向かい合っている。何れも、なだらかな稜線を描いており、纏う木々は、春から夏に向けては、新緑を深緑へと、そして、秋から冬にかけては、紅葉から雪景色へと、四季を通じて里山特有の豊かな表情を見せてくれる。また、遠く万葉の世から、数多くの歌人に愛され詠まれてきたことも共通しており、山名と共に、両山には何か縁のようなものを感じる。

雪野山には、山頂付近に雪野山古墳がある。「卑弥呼の鏡」といわれる三角縁神獣鏡が出土したことで知られる。そして、この一帯は「蒲生野」と呼ばれ、天智天皇の薬草狩りの際、大海人皇子と額田王との間で交わされた相聞歌はとりわけ有名である。ちなみに、日野川沿いにある野外活動施設の「妹背の里」。

その「妹背」の名もこの相聞歌に由来し、公園の一角には薬草狩りを彷彿させる出で立ちの二人のモニュメントが来場者を温かく迎えてくれている。また、麓の龍王寺には、柿本人麻呂を始め万葉歌人の歌が多く伝わりとともに、梵鐘に因む「三和姫伝説」が大蛇の化身の三和姫と病氣平癒のため野寺を訪れた役人小野時兼の悲恋物語の舞台として語り伝えられている。

雪野山。それは、竜神の山であると共に古代からわが国の政治や文化を彩った人たちのもう一つの姿を今に伝える伝承に溢れ、私たちの好奇心をくすぐる魅力に満ちた存在である。



妹背の里



鏡山は、その北麓を東西に縫うようにして東山道（後の中山道）が走っている。その山容の美しさから、古来歌枕として知られ、近江名山の一つである。藤原定家を始め多くの歌人が街道から望む鏡山を愛で、そこで詠まれた歌が古今和歌集などに収められている。

遠望すると勝景の鏡山も、分け入れば、別の顔を覗かせる。山麓一帯には古代の古墳が数多く今も残り、時の権力者たちが覇権を争い、そして、滅びていったことを物語る。また、同時代に須恵器が焼かれた鏡山古窯址群が大きく北麓一帯に広がる。足を延ばせば、北端の峰には「星ヶ崎城址」があり、城址からは国道8号（旧東山道）と旧鏡宿を眼下に収め、往時、軍事上の要衝だったことが窺える。

また、原始から神々が宿るとされ信仰の対象となっていた鏡山は神体山で、頂上には磐座と呼ばれる巨岩と小祠が鎮座し、稲作を豊穰に導く司水の神として京都貴船神社の祭神の分霊が祭祀されている。

鏡山。この山もまた竜神の山であると共に、その静かな佇まいも時の流れと共に異なる存在感を示してきた。今、初夏に登山道を歩むと町の花「アエンボ（コバノミツバツツ）」が紅紫の花も可憐に、人待ち顔で訪れる人を迎えてくれる。

## 最 終 章

### 「竜王の文化とは…人と道と自然が紡ぐ竜王の文化的景観」

この報告書では、有史以来、私たちのまち竜王町が見せてきたであろう様々な姿を、<sup>いにしえ</sup>「古」から現在に至るまでの時空を越え俯瞰してきた。そこで改めて気づくのは、その時々に見せる「町土を走る街道とそこを往来する市井の人々が有形無形の<sup>ふるさと</sup>郷土の顔を形づくってきた」ことである。

往古にその源流を求めることが出来る。奈良や京といった当時の都から「日常の<sup>みやび</sup>雅」を伝えた奈良道や東山道などの街道は、時の流れと共にその名を変えながらも常に「ふるさと竜王」に刺激を与え続けてきた。様々な人々の往還を伴いながら。

それは時に、信仰や心の拠り所としての祈りの文化を、時に、中央（都）に程近いこの地方を舞台とした政治文化を、時に、湖国一の穀倉地帯を背景とした農耕文化や食文化を、さらには、交通の要衝として行き交う人々がもたらす新しい技術などの産業文化であった。そして、これらの文化は、互いに重なり影響しあいながら、今の竜王へと脈々と引き継がれているのである。

あえて言うならば、「<sup>いにしえびと</sup>古人から現代人に至る様々な人の往来が、”時空を繋ぐ街道”をつくり、精神面から物質面までの多岐にわたる文化が通い合っ文明となり私たちの竜王町に至っている」のではないだろうか。

そして、特筆されるべきは、これまで見てきたように、様々な表情を見せる竜王の姿は、<sup>いにしえ</sup>「古」から続く人々と自然（神）との交流がもたらす繁栄と、人々と現代文明との交流がもたらす繁栄とが絶妙のバランスを保ちつつ、しっかりと息づいていること（共生）を雄弁に物語っており、竜王の文化を価値づけている。

まさに、「人と道と自然が紡ぐ文化的景観」は、私たちの生活様式の至る所で隅々にまで行き渡っている。竜王にとって文化とは、「<sup>いにしえ</sup>古から連綿と続く街道の路傍に咲く野の花の文化」と言えようか。

野の花から飛び立つ種子たちは、この地域ならではの文化を紡ぎ続けてきた。町民の心を癒し潤し、食を彩り、町に活気を与える。そして、未来への希望を届けてくれる。これまでも、そして、これからも・・・。

また、山道を歩き疲れた時、その傍らに何気なく咲く野の花が安らぎを与えてくれるように、<sup>ふるさと</sup>郷里を後に異郷の地にある人。今、町に住む町民そして、町を訪れる人。出来るなら、それぞれの人生の旅路に疲れた時、「竜王らしい、そして、竜王ならではの文化」こそ、野の花のごとく一服の清涼剤にも似て心の渇きを癒してくれるものであることを願う。

最後に、本報告書で触れた文化としての地域のあり<sup>よう</sup>様は、私たちの竜王の文化資源のごく一部だと思ふ。何故なら、人それぞれに思い描く文化があっていいからだ。ただ、いか様な文化であれ、私たちにとっての地域社会の文化資源をしっかりと認識し、学ぶことを通して更に新たな地域文化創造への思いを紡ぐことを怠ってはならない。このことこそが、竜王というまちを次代へと引き継ぐための営みに通じるからである。

今、町内では<sup>ふるさと</sup>郷土を改めて見つめ直し未来へ繋ごうとする人たちがいる。「竜王にまつわる昔話」を紙芝居で子ども達に語り継ごうと、そしてまた、町公民館を中心に途絶えつつある「地域に残るつるし雛」を次代へ伝えようと活動する人たちがいる。何れも、徒<sup>いたづら</sup>に過去に<sup>こうでい</sup>拘泥するのではなく、さりとして、先を急ぐあまりに、つぎはぎのような似非文化をつくるのでもない。「出来ることを無理せず」がモットーだ。そう、私たちは常に、慌てず泰然自若の心持ちで「温故知新」の志を大切

にしたい。換言すれば、これまで紡がれてきた生活文化という宝物を地域の文化資源の<sup>いしづえ</sup>礎とし、そこに共感を抱きつつ<sup>きょうじ</sup>矜持の念と共に次世代に伝え、新たな地域文化の創造へと繋いでいくことだ。

そして、竜王に住む私たち自身が住んで良かった、住み続けたいと思う町こそ、来訪者にとって訪れて良い（良かった）町、また訪れてみたい町に他ならないと考える。

そこで、忘れてならないのは、「ひとも大切な文化である」ということだ。私たちには、未来ある地域の人財を育てていくことが求められる。これからのまちづくりは、ひとづくりなのだから。

## お わ り に

報告書を締めくくるに当たり、町民憲章の前文を紹介したい。

『わたくしたちのまち竜王町は二つの山なみを背景とした沃野にはぐくまれ  
史実に残る古い歴史と恵まれた文化遺産を受けついできました  
わたくしたちはこのうるわしい郷土に誇りと自覚をもち「緑と文化の町」にふさわしい  
明るく住みよい町を築くためこの憲章を定めこれの実現につとめます』

文脈を辿ると、憲章でいう「緑」とは「二つの山なみを背景とした沃野」であり、「文化」とは「史実に残る古い歴史と恵まれた文化遺産」という解釈が出来るだろう。

しかし、令和の今、これに頷く人がどれ程いるだろうか。この憲章が定められたのは昭和 58 年 1 月 15 日であり、37 年前のこと。この間、当町を取り巻く環境が大きく変わった今、町民の意識や価値観も大きく変容し多様化したことは、冒頭の「はじめに」でも触れた。特に、「文化」という言葉から思い描くイメージが、人それぞれの様々な解釈により異なるのが現状といえる。

そこで懇話会では、個々のイメージに沿いつつも誰もが違和感なく受け入れられることを念頭に置き、「竜王の今の姿」を基に、町の来し方行く末に思いを馳せつつ、多分野にわたり先人から受け継がれてきたもの、また、未来に向け新しく胎動してきたもの等を俎上に載せて意見を交わしてきた。

そして、「どのように解釈する文化であれ、それは人の介在がなければ成り立たないこと。また、これまでも、そして、これからも、当地は地勢的にも地政(学)的にもその伝播に街道が果たす役割は大きいこと」から、「街道を舞台に、人と人、人と自然と風土の交流が織りなす賜物」として文化を整理したところであり、その範囲は、名勝旧跡等の文化遺産に留まらず産業文化・生活文化や人々の生きざま、さらには、心のあり様ともいえる心象風景にまで及んだ。

結びとなるが、1 年 4 か月に及んだ本懇話会の取り組みは、結果として「竜王の良さ、その魅力」を確認する作業となった。歳月の経過とともに人心の移り変わりもあって伝統文化や生活文化の変容を余儀なきものとする現代社会において、様々な表情を見せつつ常に変化し続ける竜王町であるが、この報告書が、今一度、竜王町や町民のアイデンティティ（存在意義）を確認するための一助になると共に、「住んで良かった、住みたい町、竜王町」として、当町の魅力発信の意味からも、文化財的視点、観光振興的視点、まちづくりの視点等で参考にして頂けるならば、委員一同、望外の幸せであり喜びであるとともに、この報告書が広く町民の間で読まれ活用されることを念じてやまない。

## 用語解説

- あ あめのひぼこ 天日槍 . . . . . 「古事記」「日本書紀」の伝承に登場する新羅の王子。  
「日本書紀」によれば垂仁天皇3年の条に、天日槍の伝承として「近江国の鏡村の谷の陶人は、天日槍の従人なり」と記されている。陶人とは須恵器生産に携わってきた工人を指している。6世紀になると「天日槍伝承」にある須恵器窯が鏡山山麓で多数操業された。
- エコツーリズム . . . . . 観光や旅行を通じて自然保護や環境保全への理解を深めようという考え方。エコロジー(ecology)とツーリズム(tourism)とを組み合わせることば。  
観光業の成功および地域の経済振興を図ることの両立をめざす。この考えに基づいたエコツアーの適正な推進を図るため、日本では、平成20年(2008年)4月にエコツーリズム推進法が施行された。
- えんぎしきじんみょうちよう 延喜式神名帳 . . . . . 延長5年(927年)にまとめられた「延喜式」の巻九・十のことで、当時、朝廷から「官社」に指定されていた全国の神社一覧の名称。延喜式神名帳に記載された神社を「延喜式の内に記載された神社」の意味で延喜式内社、または、式内社、式社といい、一種の社格となっている。
- おおあまのおうじ 大海人皇子 . . . . . 後の第40代天武天皇の幼名。舒明天皇を父、皇極天皇を母に持つ。壬申の乱に勝利し天皇即位後は、飛鳥浄御原令の制定、「帝紀」「旧辞」の編纂、八色姓の制定、官位48階の制定等、律令体制の確立に注力した。万葉集に3首が収められる。日本書紀には天智7年(668年)5月5日に薬狩りのため天智天皇が蒲生野への行幸の際、同行し、額田王との間で歌を交わしたとされる。(相聞歌)
- か きない 畿内 . . . . . 律令制度が定めた行政区域。古代の都の近郊にある行政の中心地域で、山背(山城)・大和・河内・摂津の四か国をいい、四畿内といわれた。のち、河内から和泉が分立し五畿内となる。律令国家を形成した氏族の居住地を行政上特別扱いしたものの。

グリーンツーリズム . . . . . 農村や漁村で地域の人との交流や自然や食事、文化などを味わい楽しみながら休暇を過ごす旅行スタイルのこと。「日帰り型」と「宿泊・滞在型」がある。

鏡山古窯址群 かがみやまこようしぐん . . . . . 鏡山とその周辺の丘陵地一帯に広がる6～8世紀にかけての須恵器窯跡。一説では、その数100基を超えともいわれ県下最大級である。6世紀後半から7世紀初めに最盛期を迎えたとみられ、その後、徐々に規模を縮小させながら8世紀まで生産を続けた。

元服 げん ぶく . . . . . 奈良時代以降、男子が成人になったことを示す儀式。ふつう、11～16歳の間に行われ、公家では冠、武家では烏帽子えぼしをいただくのが儀式の中心で、「大人になる」「男になす」という。

御霊信仰 ごりょうしんこう . . . . . 人々を脅かすような天災や疫病の発生を、恨みを持って死んだり非業の死を遂げた人間の「怨霊」のしわざと畏怖し、これを鎮めて「御霊」することにより祟りを免れ、平穏と繁栄をもたらそうとする信仰。

虫送りに関しては、「平家物語」に登場する武将、斎藤実盛さいとうまもりが篠原の戦いの最中、乗っていた馬が稲株に足を取られて転倒し、敵方に討たれてしまったため、それを恨んで、稲を食い荒らす害虫に生まれ変わったとの伝承がある。この他にも、平安時代末期には、都（京）で天災や疫病の流行が多発したことから、大宰府に左遷された菅原道真等の祟りと恐れられ盛んに信仰されたことが知られている。

さ 三角縁神獣鏡 さんかくぶちしんじゅうきょう . . . . . 古墳に副葬された鏡で、近畿を中心に多くが出土している。「魏志倭人伝しわじんてん」には、景初3年(239年)、当時の中国(魏)に朝貢した邪馬台国の女王卑弥呼に、魏の皇帝が銅鏡100枚を下賜したの記載があることから、三角縁神獣鏡さんかくぶちしんじゅうきょうがその鏡であるとする説が有力である一方、国産の鏡とする説もある。

さんじゅうさんねんしきねんたいさい  
三十三年式年大祭

・・・

苗村神社の氏子区域は近郊三十三郷（三十余郷）からなり、毎年9月5日に天下泰平と五穀豊穰を祈念する大祭を行っていたが、打ち続く凶作と戦乱のために慶長四年(1599年)、三十三村にちなみ、以後は式年大祭を33年目ごとに催すことになった。その後、明治19年に新暦で10月12日前後3日間を大祭の吉日と定められた。

尚、33年の数え方は、大祭の年から起算して数えることから、実際には32年に一度斎行されることになる。

山車が出て、祭囃子に合わせた奉納芸能や甲冑武士等が苗村神社に集結するとともに、御旅所への渡御なども盛大に行われ、神社や沿道は町内外から多くの人々で賑わう。

しょうりせい  
条里制

・・・・・・

わが国において、古代から中世後期にかけて行われた土地区画（管理）制度。ある範囲の土地を約109m間隔で直角に交わる平行線（方格線）により正方形に区分するという特徴がある。

ショッピングモール・・・

遊歩道や広場などがある大規模な商業観光施設。

そうもんか  
相聞歌

・・・・・・

「万葉集」で、「相聞」に分類される内容の歌。男女、親子、兄弟、友人などの間の、恋慕あるいは親愛の情を述べた歌。その大部分は男女の恋愛を謳ったものである。

た

テクノポリス・・・・・・

先端技術産業や大学・研究機関を中核として地域経済の発展をめざす高度技術集積都市。住環境も整備した新時代の産業都市を建設しようとする国の構想に基づく。1980～90年代の日本の地域開発の柱となった。

とうきんどう  
東山道

・・・・

律令時代に畿内から内陸部を通り、今の東北地方へと続く幹線道路として整備された。その起点は、近江国（滋賀県）で、終点は陸奥国（岩手県）まで。

な

なかせんどう  
中山道

・・・・

江戸時代に幕府によって整備された五街道の一つ。江戸日本橋から信濃・美濃の内陸部を経て、近江（滋賀県）草津で同じく五街道の一つ東海道と合流し、京都に至る幹線道路。多くの部分で、とうきんどう東山道のルートと重なる。

- 奈良道<sup>ならみち</sup> . . . . 古代（奈良時代）、都（平城京：今の奈良市）から、山城（京都府南部）、紫香樂（信樂）辺りを経て、現在の水口、竜王等の湖東地方へ通じていたとされる街道。人の往来と共に、都から多くの物資がもたらされる等、当時、当地域の人々の生活様式に影響を与えたといわれる。
- 日本三大和牛<sup>にほんさんだいわぎゅう</sup> . . . . 日本<sup>にほん</sup>の代表的な銘柄牛あるいは銘柄牛肉をいう。松阪牛・神戸牛（ビーフ）と、近江牛の三つをいう。
- 額田王<sup>ぬかたのおおきみ</sup> . . . . 日本書紀には、鏡神社の神官であったとされる鏡王の娘で大海人皇子<sup>おほあまのおうじ</sup>（天武天皇）に嫁ぎ、十市皇女<sup>といちのひめみこ</sup>を生むとある。生年は不詳。十市皇女<sup>といちのひめみこ</sup>の出生後、天武天皇の兄である中大兄王子<sup>なかのおおえのおうじ</sup>（天智天皇）の寵愛<sup>ちゆうあい</sup>を受けるとい話はあるが確証はない。
- 『万葉集(1-20)』 「あかねさす 紫<sup>むらさき</sup> 野行き<sup>の</sup> 標野行き<sup>しめの</sup> 野守<sup>のもり</sup>は見ずや 君が袖振る」
- 『万葉集(1-21)』 「紫の にはほへる妹を憎くあらば 人妻故に 吾恋ひめやも」
- の歌は、額田王<sup>ぬかたのおおきみ</sup>と大海人皇子<sup>おほあまのおうじ</sup>の間で交わされ相聞歌<sup>そうもんか</sup>として知られるが、これに関しては諸説がある。
- ま 源義経<sup>みなもとのおよしつね</sup> . . . . 平安時代末期から鎌倉時代初期の武将。幼名を牛若丸という。平治の乱後、平氏に捉えられたが許され鞍馬寺に入った。その後、奥州藤原秀衡<sup>ふじわらのひでひら</sup>の寵愛を受けるとも、兄頼朝の平氏討伐の挙兵に応じて、指揮官として戦功を立てた。しかし、頼朝の命に従わず不仲となり逆に朝敵として追討されることから、再び、奥州藤原秀衡を頼りその庇護<sup>ひご</sup>を受けたものの、その子泰衡<sup>やすひら</sup>に襲われ自刃した。平治物語には、鞍馬寺から奥州藤原秀衡<sup>ふじわらのひでひら</sup>の下に向かう際、鏡の宿に寄り元服したと伝えられる。

## 竜王の文化を検討する懇話会委員名簿

【順不同・敬称略】

氏 名	所 属 等	備 考
井口 貢	同志社大学 政策学部 教授	会 長
川部 定剛	前 竜王町文化協会 会長	
山添 信男	竜王町公民館 館長	
古株 利平	竜王歴史倶楽部 会長 (竜王町観光ウエルカムガイド)	副会長
久保井 美喜子	自然観察グループかわせみ 代表	
大沼 芳幸	N P O 法人 歴史資源開発機構 ヘリテージ マイスター	
関川 雅之	前 竜王町公民館 館長	
大橋 裕子	元 町教育委員	
中村 匡希	前 地域おこし協力隊員	

任期：平成 30 年 12 月 1 日～令和 2 年 5 月 3 1 日

### ※ 懇話会 事務局

竜王町教育委員会事務局 生涯学習課

竜王町 商工観光課

表紙写真：南方上空よりびわ湖越しの比良山系を背景に望む初夏の竜王町全景

裏表紙写真：真綿のような雪に覆われた冬の牟礼公園（小口）

